

# コリマ・ユカギール語の動詞接尾辞 *-l'el* の用法の 歴史的変化について

遠藤 史

## 1. はじめに

東シベリアに話される系統的に孤立した言語であるユカギール語には *-l'el* の形を持つ動詞接尾辞（動詞語幹につく接尾辞）がある。この動詞接尾辞は、例文（1）と（2）のように、現存する2つのユカギール語—すなわち、コリマ川下流域のツンドラ・ユカギール語およびコリマ川上流域のコリマ・ユカギール語—のどちらにも存在が確認できる。この動詞接尾辞は、ユカギール語固有の要素として、両言語が分岐する以前の段階から継承されてきたと考えることができる。

ツンドラ・ユカギール語：

- (1) *tudel öl'd'e-le me = wie-l'el-u-m*  
 3sg ボート -ACC FOC = 作る -INFR-0-TR:3sg  
 「彼はボートを作ったようだ」(Krejnovič 1982:140)<sup>1)</sup>

コリマ・ユカギール語：

- (2) *taŋ šoromo-pul parna: ažu:-gele medi-nu-l'el-ŋa:*  
 その 人 -PL カラス ことば -ACC 聞く -PROG-INFR-TR:3pl  
 「その人々はカラスのことばを理解したそうだ」

これらの例文からある程度わかるように、動詞接尾辞 *-l'el* の使用によって、文の表わす事態は話者が直接経験したものではなく、他者から聞いたものか、あるいは推測によって得たものだという意味が加わる。情報の源に関係するこの種の意味は、最近の言語類型論において、証拠性 (evidentiality) という観点から研究されてきた諸言語の文法的現象と通底する。ユカギール語のこの動詞接尾辞についても、世界の諸言語の証拠性を言語類型論の視点から扱った

1) 以下引用する例文について、原文がロシア語のもの、および筆者自身が得たデータには日本語によるグロスと訳をつけた。原文が英語のものについては、原文の英語訳をそのまま引用した上で、必要場合は英語によるグロスを筆者が補った。

Aikhenvald & Dixon (2003) において、すでに Maslova (2003a) が取り上げて論じた。この議論はその後、ユカギール語の文法に刻印された証拠性として概説書にも紹介されている (Pereltsvaig 2017:112-115)。ユカギール語におけるこの *-l'el* という動詞接尾辞は、言語類型論の視点からも一定の注目を集めうる、興味深い要素であると言えるのではないだろうか。

この動詞接尾辞の基本的な意味は、上記のように証拠性という観点から眺めたとき、ある程度見通しの良い記述が得られる。しかし、実際に現地で採録されたテキストを細部にわたって検討してみると、このような基本的な意味を想定するだけでは説明が難しい場合も多い。本論文では、現代のコリマ・ユカギール語の用例を、実際のテキストを読むことによって検討し、具体的な用法と記述との間に認められる隔たりを指摘したい。次いで、現在から約 100 年前に採集されたコリマ・ユカギール語のより古い段階でのテキストを検討の対象に加えることにより、この動詞接尾辞の用法の歴史的変化によってこの隔たりが生じた可能性を論じたい。

本論文の構成は次の通りである。まず第 2 節では、考察の対象となる動詞接尾辞 *-l'el* の基本的意味について、これまでの記述を整理しつつ、概略を確認する。第 3 節では具体的なテキストの検討に移る。まず現代のコリマ・ユカギール語から 2 編のテキストを取り上げ、前節で整理した記述と突き合わせて検討する。次いで、現在から約 100 年前の過去のコリマ・ユカギール語の 2 編のテキストを取り上げ、同様の検討を行う。第 4 節では以上の議論をまとめ、この動詞接尾辞 *-l'el* の用法の歴史的変化の可能性を論じる。第 5 節ではまとめと今後の展望を示したい。以上が本論文の構成である。

## 2. 動詞接尾辞 *-l'el* の基本的意味

コリマ・ユカギール語のこの動詞接尾辞の最初の記述は、現在から約 100 年前のユカギール語を対象とした Jochelson (1905) の文法概説に見出せる<sup>2)</sup>。この接尾辞 (ヨヘリソンの表記では *-lel*) は「伝聞法」(evidential mood) を標示する法のマーカーとして記述される。基本的意味についてはやや詳しい説明がある：

The evidential mode is used when something is told, not from the experience of the narrator, but (1) from hearsay, (2) as a supposition, (3) as a conclusion drawn from certain traces that the action had taken place, (4) as a dream, and (5) as reminiscences of events which had

2) ヨヘリソンがこの文法概説の対象としたのは、コリマ川の支流のヤサーチナ川とコルコドン川の流域で話されるユカギール語のコリマ方言 (the Kolyma dialect) である (Jochelson 1905:370-371)。今日コリマ・ユカギール語 (Kolyma Yukaghir) と呼ばれる言語はこれの直接の子孫に当たる。なおヨヘリソンはこの時点で、ツンドラ方言 (the Tundra dialect) と呼びうる言語 (今日のツンドラ・ユカギール語 (Tundra Yukaghir)) が存在することも認識しており、その使われる地域も特定している。

occurred in the early childhood of the narrator, and of which he had learned subsequently. (Jochelson 1905:400-401)

すなわちこの説明では、まず話者自身の経験ではないことを語る場合にこの法が用いられるという特徴を指摘する。次いで、この法が用いられる具体的なケースとして、(1) 伝聞によって語る、(2) 推測として語る、(3) 行動の痕跡から得られた結論として語る、(4) 夢として語る、(5) 語り手の幼少期に起こり、後にそうと気づいたことの思い出として語る、の5つをあげている。この5つは一見雑多なケースの集積に見えるかもしれないが、話者自身が明瞭な意識を持って得た情報ではないという点が共通し、(この接尾辞なしで語られる) 話者自身の経験との間に意味的対立が認められる。このような詳しい意味の記述は今日の水準に匹敵するもので、ヨヘリソン自身がこの接尾辞の意味を的確に認識していたことを示している。この文法概説中の例文を2つあげておく：

(3) *met ečie tiŋ numo-le a:-l'el-u-m*

I father this house-INSTR make-INFR-0-TR:3sg

'My father made this house (it is apparent)' (Jochelson 1905:401)<sup>3)</sup>

(4) *torou medin pogi-l'el-i*

reindeer just run-INFR-INTR:3sg

'A wild reindeer just now ran by (would be said, should fresh traces of reindeer-hoofs be examined on the ground)' (Jochelson 1905:401)

ここで例文(3)は上記の「推測」の用例、そして例文(4)は「行動の痕跡から得られた結論」の用例と言えよう。この記述は同時に、その対象となった現在から約100年前の過去のコリマ・ユカギール語において、この動詞接尾辞が生産的に用いられていたことを示しているだろう。

その後の主なコリマ・ユカギール語の記述においても同様に、この動詞接尾辞は法のマーカーとして扱われてきている<sup>4)</sup>。その基本的意味の記述は上で検討した Jochelson (1905) の延長線上にあると言えるが、主語の人称による意味の細かな違いについて、より詳細な観察が加わっ

3) ヨヘリソンが与えている英語訳はユカギール語の語順に沿っている。英語として自然な語順とするため、語順を若干変更した。単語の付加等はしていない。

4) 代表的な文法記述としては Krejnovič (1982) と Maslova (2003b) がある。なお、これらの文法記述のためのフィールドワークが行われたのはコリマ川上流地域、ヤサーチナ川沿いのネレムノエ村を中心とする地域である。Krejnovič (1982) はコルコドン川沿いの方言にも言及し、音韻論を中心に下位方言レベルの差異を多少指摘している。なお、筆者の得た情報では、コルコドン川流域にコリマ・ユカギール語の話者は現在のところ定住していない。

ている。たとえば Krejnovič (1982) は、主語が1人称の場合にもこの動詞接尾辞が用いられることを指摘しつつ、次のような短い対話の例文をあげている：

- (5) *tet t'ine-mek? ---- met t'ine-l'el-d'e*

2sg 切る -TR:2sg 1sg 切る -INFR-INTR:1sg

「お前は（その木を）切ったのか？ --- 私は切ったようだ」(Krejnovič 1982:141)

Krejnovič (1982:141) によれば、この会話は次のような文脈で使われる。—ある木が気に入って、その木を誰かのために切つてやろうと目論んでいた。別の人がそのことを知らずに、その木を切り倒してしまった。そこで最初の人は「その木を切ったのか？」と尋ね、対して別の人は動詞接尾辞 *-l'el* を用いて「どうも（訳を知らずに）切ってしまったようだ」と答えた。—すなわち、この会話では *-l'el* を用いることにより、意図せずに、誤って行動したという意味が加わっている。主語が1人称の場合、自らの行動を「経験していない」という事態は考えにくいので、自分がうっかり行ってしまった行動をこの動詞接尾辞が表わせるというクレイノヴィチの指摘は示唆に富む。次の例文も同様の例：

- (6) *kie, jonr-a:-l'el-d'e*

相棒 眠る -INC-INFR-INTR:1sg

「相棒、（私は）眠ってしまったようだ」(Krejnovič 1982:141)

この文もまた、1人称の話し手が相棒に、自分がうっかり眠ってしまったことを伝えている。

Maslova (2003b) もこの動詞接尾辞を法のマーカーとして記述しているが、上記と同様の意味記述に加え、話し手が実感した意外性 (mirativity) をこの接尾辞が表わしうることを指摘している。たとえば次の例文において、

- (7) *önme-n'-d'e šoromo o:-l'el-d'ek!*

mind-PRPR-ATTR person COP-INFR-INTR:2sg

‘You have turned out to be a clever person!’ (Maslova 2003b:174)

話し手は自分の見聞した諸々の事実から相手が賢くないだろうと思っていた。しかし意外なことに、話している時点において、その考えが間違っていたことに気がついたという驚きが、この動詞接尾辞によって示されている。

動詞接尾辞 *-l'el* の意味・用法に関する記述はこのように積み上げられてきたのであるが、Maslova (2003a) は最近の言語類型論で研究が進んできた証拠性の視点からさらに検討を重ね、

より大きな構図の中にこの動詞接尾辞の意味・用法を位置づけている。まず、この論文集の枠組みである Aikenvald and Dixon (2003) の証拠性の類型論的パラメータを用いれば、ユカギール語のこの接尾辞は、「目撃／非＝目撃」(eyewitness vs. noneyewitness) という対立の一項に収まるものであって、「目撃」の方は直説法（ゼロマーカー）により、「非＝目撃」の方は動詞接尾辞 -l'el により示される<sup>5)</sup>。なお、この「目撃」の中には、他の知覚、たとえば聴覚による認識も含まれるという。たとえば次の例文について、

- (8) [...] *aji:-l'el-u-m,            šar            goha-s'* [...]   
 shoot-INFR-0-TR:3   something   burst-INTR:3sg   
 '[...] (then) he shot, something burst [...]' (Maslova 2003a:223)

狩りの途中で、話し手が銃撃の音（2 番目の節）を聞き、相棒が撃ったのだと推理した（動詞接尾辞 -l'el が含まれる最初の節）のだと指摘している (Maslova 2003a:223)。

同じく興味深いのは、話している時点において、過去の事態についての適切な情報を得たことを表わす場合に、この動詞接尾辞が用いられるという指摘である (Maslova 2003a:224)。たとえば次の例文において、話し手は母とその仲間が来たこと（最初の節）を目撃しており、かつ、摘まれたベリーも目撃している。

- (9) *emej=tanpe    kel-ŋi,            lebejdi:-le    ningo: šaqal'e-š-l'el-ŋa:*   
 mother=ASC   come-3pl:INTR   berries-ACC   lots.of   gather-CAUS-INFR-3pl:TR   
 'Our mother and her companions came, they had gathered a lot of berries' (Maslova 2003a:224)

しかし話し手は彼らがベリーを摘むところは目撃していない（動詞接尾辞 -l'el が含まれる 2 番目の節）。話し手は自分の目撃したものから遡って、母たちがベリーを大量に摘んだのだと推理したのである。このような用法は、1 人称の語り手の場合、自分のうっかりした誤りに後で気付いたという用法（上記の Krejnovič 1982 の指摘を参照）を導く。たとえば次の例文に関して、

- (10) *ta:    ejre-t            met me:me: abut   aŋil'-ge   ta:    cha:j-e*   
 [there walk-SS:IPFV]   I   bear   lair   inlet-LOC   there   tea-ACC   
 *o:žā:-l'el-d'e*   
 drink-INFR-INTR:1sg   
 'While walking there, I drank tea near the lair of a bear' (Maslova 2003a:224)

語り手が熊のねぐらの存在を意識したのは語っている時点である。語り手はこの時点において、かくも危険なところで自分が茶を飲んでいたことに気づいたのだ。Maslova (2003a) はこのような現象を「遅延した証拠」(deferred evidence) と特徴づけているが、これはすでに Jochelson (1905) が指摘していた5番目の用法、すなわち、語り手の幼少期に起こり、後にそうと気づいたことの思い出として語る、という用法にも関連するものであろう。

動詞接尾辞 *-l'el* の意味・用法はこのように多岐にわたるが、用例を検討するにあたって、さしあたり基本的意味として次の2点を押さえておきたい<sup>6)</sup>。第1の基本的意味は、この接尾辞が現れるとき、話者はそれが表わす事態を直接目撃(あるいは知覚)していないということである。この場合、話者はその事態を他者から伝聞等で得ることになるか、何らかの証拠から推理することになる。具体的な用法としては、伝聞、推測、痕跡からの推理などがここに含まれよう。第2の基本的意味は、この接尾辞が現れるとき、話者はそれが表わす事態についての情報を、事態が起こった時点では持っていなかったということである。この場合、話者は後になって、その事態についての適切な情報に気づくことになる。具体的な用法としては、夢、幼少期の記憶の意味づけ、過去の事態の意味づけ、誤りの認識、意外性などがここに含まれよう。

### 3. テキストの用例の検討

以上2点の基本的意味をもとにして、現代と過去のコリマ・ユカギール語テキストの具体的な検討を行いたい。紙数が限られているので、以下では3人称中心のテキスト(3人称の語り)と1人称中心のテキスト(1人称の語り)をそれぞれ1篇ずつ見ていく。この両方のケースを取り上げる理由は、ここまでに見てきたように、特に1人称の語りの場合には、過去の事態の適切な意味づけや気づき(第2の基本的意味)が関係することが多く、やや細かな観察が必要となるからである。

#### 3.1 現代のコリマ・ユカギール語に関して

##### 3.1.1 3人称の語り

3人称の語りとして、現代のコリマ・ユカギールの民話集である Nikolaeva (1997) から36番のテキストを取り上げる。典型的な民話の語り口を持ち、筋の進行も直截である。

テキストの冒頭からは登場人物の紹介が続く。「昔々」と始まることから分かるように、遠

✓ 5) Aikenvald and Dixon (2003) の指摘する他のパラメータの例としては、「伝聞／それ以外」の2項対立や、「目撃／推理／伝聞」の3項対立、「目撃／目撃以外の知覚／推理／伝聞」の4項対立などがある。

6) この2つの基本的意味は相互に関連しており、どちらに当たるものか明確に判断できない場合もあろう。以下の用例の検討では、具体的に目撃や伝聞などが想定できるような場合、第1の基本的意味として扱う。なお動詞接尾辞 *-l'el* には未来時制マーカーを伴って仮想的な意味で用いられる場合もあるが(Maslova 2003b:175)、この用法は本論文で論じる範囲の外にある。

い昔のできごとであり、実話かもしれないが、話者が目撃した出来事ではない。

- (11) *tuda: tuda: čöl'ə-d omni:-gə irki-n paj modo-l'əl,*  
 long. time.ago ancient-ATTR people-LOC one-ATTR woman live-INFR:INTR:3sg  
*irki-n ö-n'e:-l'əl. tat əll'o:də nužu-ŋo:-t modo-l'əl-ŋi.*  
 one-ATTR child-have-INFR:INTR:3sg then very poor-be-CONV live-INFR:INTR:3pl  
 'A long time ago in the time of the ancient people there was a woman, she had one child.  
 They lived very poorly.' (Nikolaeva 1997:30)

したがって各々の節に動詞接尾辞 *-l'el* が現れているのは自然であろう。食糧が乏しい中、母親は外出して何かを調達してくる。ここにも *-l'el* は引き続き現れる。

- (12) *emej-gi ukej-l'əl, ičči l'ə-llə kel-l'əl*  
 mother-POSS go.out-INFR:INTR:3sg a.while be-CONV come-INFR:INTR:3sg  
*čašiqan-gə šar-ə kes'i:-l'əl-u-l, [...]*  
 bowl-LOC something-INSTR bring-INFR-0-ANR  
 'The mother went out, after a while she brought something in a bowl [...]' (Nikolaeva 1997:30)

この箇所から接尾辞の分布の状況が変わる。子どもはこれを見て、母親に何を持ち帰ったのかと尋ねる。

- (13) *ö-gi tamun jö-dəllə tude emej laŋi šubežə-t ta:s'ilə joulus'-u-m,*  
 child-POSS that see-CONV his mother to run-CONV then ask-0-TR:3sg  
*"tön, emej, lem-dik kes'i:-mə?"*  
 this mother what-FOC bring-TR:2sg:OF  
 'The child saw that, came to his mother and asked: "Mother, what have you brought?"'  
 (Nikolaeva 1997:30)

ここから明らかなように、この節には動詞接尾辞 *-l'el* が現れていない。ここで、会話の直接引用（最後の節）ではない地の文の動詞が *-l'el* なしの *joulus'um* 「(彼女は) 尋ねた」となっている理由は、前の節で考察した基本的意味では説明できない。言うまでもなく、この事態は話者が直接目撃したものではないからだ。母親は子どもにカーシャ（牛乳粥）を作ってやると約束し、子どもは喜んで外に遊びに出かけていく。



- (14) *emej-gi mon-i, “mə qon, jodə-ji:k”. tat ö-gi*  
 mother-POSS say-INTR:3sg AFF go:IMP:2sg play-ITER-IMP:2sg then child-POSS  
*qon-i tude könmə-n’ə jodə-din.*  
 go-INTR:3sg [his friend-COM play-SUP]  
 ‘The mother said: “Well, go and play”. That child went to play with his friends.’ (Nikolaeva 1997:30)

ここでも地の文に動詞接尾辞 *-l’el* が欠けている。事実、さきほどの例文 (13) 以降、動詞にはこの接尾辞が一切現れてこないのである。さて、母親は自分の作った粥を自分で食べてしまい、帰ってきた子どもは粥を食べられず、悲しがって眠ってしまう。

- (15) *tamungə ö-gi ibile:-j, ibil’e:-llə abuda:-j, tat*  
 then child-POSS cry-INTR:3sg cry-CONV go.to.sleep-INTR:3sg then  
*uŋžu:-ŋi.*  
 sleep-INTR:3pl  
 ‘Then the child cried, crying he went to sleep, and so got to sleep.’ (Nikolaeva 1997:30-31)

翌朝、子どもが動かないので、母親がよく見ると、子どもは死んでいた。ここで、最後の節の動詞において、再び動詞接尾辞 *-l’el* が現れる。

- (16) *tamun jö-dəllə iŋl’e:-j, tat omos’ jö-m, ö-gi tude*  
 that see-CONV get.frightened-INTR:3sg then well see-TR:3sg child-POSS her  
*taŋ amda:-l’əl.*  
 that die-INFR:INTR:3sg  
 ‘After seeing that she got frightened, looked more closely — her child had died.’  
 (Nikolaeva 1997:31)

次の日、母親が外に出ると、一羽の小鳥が飛んできて鳴く。それを見て母親は嘆く。この箇所では、次の例文の後半にある母親の述懐の中に動詞接尾辞 *-l’el* が現れる。

- (17) *taŋ paj jö-t oko:-t ibil’e:-j, mon-i, “mət ö ti*  
 that woman see-CONV stand-CONV cry-INTR:3sg say-INTR:3sg I child here  
*erej ibiši: qašə-gət all’a:-lgə amda:-l’əl ubuj.”*  
 thus milk porridge-ABL offend-SS:1/2sg die-INFR:INTR:3sg true



'Having seen that that woman was standing, crying, she said: "True, this child of mine died being offended that I ate the milk porridge.'" (Nikolaeva 1997:31)

以上の分布の状況を整理してみよう。いま問題にしている動詞接尾辞 *-l'el* が現れるのは、冒頭から例文 (12) までの間の節、および例文 (16) 以降に限られる。さらに詳しく観察すると、例文 (16) 以降であっても、*-l'el* が現れる動詞は *amda:l'əl* 「死んだ」に限られ、それ以外の動詞（たとえば例文 (17) の最初の 2 つの動詞）にはこの接尾辞は現れない。話者はこのテキストの表わす事態を目撃していないのであるから、第 1 の基本的意味を想定するだけでは、このような偏った分布を説明することはむずかしい。では、上記の第 2 の基本的意味をさらに考慮した場合、どのように説明できるだろうか。たとえば例文 (16) と (17) のそれぞれ最後の動詞 *amda:l'əl* におけるこの接尾辞の出現については、第 2 の基本的意味を援用することによって説明が可能であろう。「死んだ」ことが疑問の余地なく受け止められたのは、実際に起きた時点ではなく、しばらく後になってからであろうからだ。しかしながら、この説明を採用するとしても、特に筋が力強く進んでいく物語の中盤において、動詞接尾辞 *-l'el* が一切現れない理由をうまく説明することはなお困難である。

### 3.1.2 1 人称の語り

1 人称の語りとして、Nikolaeva (1997) から 22 番のテキストを取り上げる。語り手の子どもの頃の実体験に基づく一種の怪談である。自ら目撃したことを語るテキストなので、当然ながら動詞接尾辞 *-l'el* の生起はごく少数にとどまる。

語り手の家族たちはコルホーズの仕事で漁をしていた。夜になり、男たちはいびきをかいて眠っているが、語り手は眠れないでいる。夜明け頃になって、湖の方から音が聞こえ、ボートで何かが近づいてくる。

- (18) *mōžžə-lugə*      *o:ži:-n*      *qoli-lək*      *mödu:-l*,      *eks'il'-ə*      *kin-tək*  
 be.awake-SS:1/2sg    wather-PROL    noise-FOC    be.heard-ANR    boat-INSTR    who-FOC  
*kel-lə*      *mode-j-l*.  
 come-VN:INSTR    be.heard-PFV-ANR  
 'While I was awake, a noise was heard on the water: somebody was heard to come on a boat.' (Nikolaeva 1997:20)

近づく姿を語り手は目撃していないので、ここには動詞接尾辞 *-l'el* が現れることが期待されるが、この箇所では *möde(j)-* 「～が聞こえた」という知覚動詞を用いることにより、この接尾辞が使用されてないと考えられる。

やがてその姿はテントに近づいてきたようで、石があちらこちらに乱れ飛ぶ音が聞こえる。そして人影はこう尋ねる。

- (19) *“pulut-pə čö uŋžu:-l’əl-ŋi? uŋžu:-lo:-pə-də jola:t*  
 old.man-PL already sleep-INFR-INTR:3pl sleep-RES-PL-ATTR after  
*kel-l’əl-jə. čö uŋžu:-l’əl-ŋi”.*  
 come-INFR-INTR:1sg already sleep-INFR-INTR:3pl  
 ‘Have the old men already gone to sleep? It seems I’ve come after they have gone to sleep. They have already gone to sleep.’ (Nikolaeva 1997:21)

テキスト中ではこの箇所だけに動詞接尾辞 *-l’el* が出現している。近づいてきた人影の方からはテントの中で怖がっている語り手や眠っている男たちは見えない。したがって、*uŋžu:l’əlŋi* 「(彼らは) 眠っているようだ」という用例は第1の基本的意味に照らしてうまく説明できる。また、2番目の節にある1人称の動詞 *kell’əlŋə* 「(私は) 来たようだ」は、第2の基本的意味に関連し、うっかりした誤りを示しているだろう。ここに至って語り手はあわててテントの外に踏み出すが、そこには誰もおらず、かわりに何か冷たいものが首筋を打つ。母親にこの出来事を知らせると、将来きっと不吉なことが起こるだろうと言われ、語り手は湖に魔除けを投げ入れる。しかし母親の予言したように、

- (20) *tamun jola:t mət ataqu-n ča:ča: o:ži:-gə əjl’ə-ŋi.*  
 that after I two-ATTR elder.brother water-LOC not.exist-INTR:3pl  
 ‘After that my two elder brothers drowned.’ (Nikolaeva 1997:21)

この最後の事態は、おそらく語り手の目撃していない突発事故である。したがって、動詞接尾辞 *-l’el* の出現が予測されるけれども、実際には出現していない。出現しない理由は現時点では判然としない。

以上、現代のコリマ・ユカギール語のテキスト2篇を検討しつつ、動詞接尾辞 *-l’el* の生起を観察してきた。全体的に見ると、この接尾辞は3人称の語りのテキストにおいて、1人称の語りの場合よりは頻繁に現れる。しかしながら3人称の語りの中でも、第1の基本的意味（話者の目撃）に照らして当然この接尾辞が現れると予測されるような箇所において、実際には現れていないケースが多い。つまり、話者が目撃していない事態を語っているにもかかわらず、実際のテキストの中では、この接尾辞なしで語っているケースが多いのである。第2の基本的意味（過去の事態の適切な意味づけ）に関しては、実例が少ない上、文脈を検討しなければならぬ場合が多いのでまだ適当な判断はできない。しかしながら、上記で検討した事例から見

る限り、この基本的意味を想定することによって説明可能な場合は十分あるだろう。

## 3.2 過去のコリマ・ユカギール語に関して

### 3.2.1 3人称の語り

次に、ヨヘリソンによって現在から約 100 年前に採録された過去のコリマ・ユカギール語のテキストを検討しつつ、動詞接尾辞 *-l'el* の出現の状況を確認していく。結果を先に述べておくと、過去のコリマ・ユカギール語のテキストにおいては動詞接尾辞の *-l'el* の出現は現在よりもはるかに少ない。より正確に言えば、むしろ見つけるのが困難なほどの少なさであり、この動詞接尾辞が（とりわけ 3 人称の語りにおいて）比較的頻繁に出現する現代のコリマ・ユカギール語のテキストと鋭い対照をなす。すでに第 2 節で指摘した通り、当時のコリマ・ユカギール語の記述で意味・用法が詳しく検討されていることから見て、この動詞接尾辞が当時のコリマ・ユカギール語に存在していたことは確かである。したがって、テキストにおけるこのような不可解な出現状況は十分検討に値する。以下、テキストの実例を観察してみたい。

3 人称の語りの検討対象としては、Jochelson (1927) に収録されたコリマ・ユカギール民話から 2 番のテキストを取りあげる。この民話の主要な「登場人物」はワタリガラスとライチョウである。話し手が彼らの行動や「会話」を自ら目撃したとは考えにくいので、動詞接尾辞 *-l'el* は頻繁に出現するだろうと予測できる。ところが実際のところはそうっていない。民話の最初はこのような始まる：

- (21) *čomoparana: le-j*                      *n'atlebie-n'e*      *naŋa*      *n'e=punnumie-ŋi.*  
 raven              live-INTR:3sg   ptarmigan-COM   together   RECP=neighbor-INTR:3pl  
*čomoparana: n'atlebie-ŋin*      *xonn-i.*  
 raven              ptarmigan-ALL   go-INTR:3sg  
 'Raven and Ptarmigan lived together. They were neighbors. Once Raven came to Ptarmigan.' (Jochelson 1927:244)

一見して分かるとおり、動詞には冒頭から *-l'el* が欠如している。たとえば *lej* 「(彼は) いた」や *xonni* 「(彼は) 行った」などの動詞がその例である。この接尾辞が出現するのは、冒頭から 6 つ目の節の末尾に置かれた動詞である。ワタリガラスに最近の状況を問われたライチョウは、次のように答える：

- (22) "*tiŋ n'emolkil-ge met legul omoče ukej-lel.*"  
 this year-LOC   I   food well   grow-INFR:INTR:3sg  
 'I am well provided this year.' (Jochelson 1927:244)

この用例自身は、ヨヘリソンの英語訳からも分かるように、ライチョウが手に入った食物を思い描き、推測として語ったものであろう。これは第1の基本的意味の領域に属する。さて、ライチョウに行動を批判されたワタリガラスは、怒ってライチョウの巣に乱入し、子どもたちを殺した上、ライチョウの上着まで奪ってしまう。

- (23) *čomoparna: n'atlebie+uorpe-gele čumu kude-či-m. n'atlebie+n'er-gele*  
 raven ptarmigan+children-ACC all kill-INC-TR:3sg ptarmigan+thing-ACC  
*čumu miĵ-u-m.*  
 all take-0-TR:3sg  
 'Raven killed her children, took all her belongings [...]' (Jochelson 1927:245)

この箇所でも接尾辞 *-l'el* は現れていない。嘆き悲しんだライチョウはワシに窮状を訴えかける。さまざまな鳥たちの協力によってワタリガラスはワシの下に連行され、厳しい取り調べを受けて血を流す。ついに罪を認めたワタリガラスは、哀願によって命だけは助けてもらったものの、出血のせいで羽の色が黒くなってしまった。

- (24) *jan kinije-ge jo:le-j. jalmašte kinije-ge omol-bo-i.*  
 three month-LOC be.sick-INTR:3sg third month be.good-INC-INTR:3sg  
*taŋdiet iĵi ebibu-mu-i.*  
 from.then now be.black-INC-INTR:3sg  
 'For three months he was sick. He got well finally, but from that time on, Ravne has been black.' (Jochelson 1927:246)

この文は民話の終わりに位置している。この例文から分かるとおり、最後の部分に至っても接尾辞 *-l'el* が出現しないことに注意されたい。

以上の分布状況をまとめると、原文にして約2ページほどの比較的長い民話テキストの中に現れた動詞接尾辞 *-l'el* は、上にあげた例文(22)に認められるただ一例ということになる。これは3.1.1節で考察したような、現代のコリマ・ユカギール語のテキストに見られる分布状況とは大いに異なっている。

### 3.2.2 1人称の語り

Jochelson (1927)に見出される民話テキストはすべて3人称の語りを持つ。そのため、以下では1人称の語りの例として、ごく短いものではあるが、同じ民族誌に収録されたコリマ・ユカギールの歌の中から、ある少女の歌として採録されたものを検討したい。これは少女が自分

の恋心を歌ったものである。歌の冒頭は次のようである。

- (25) *omni-n'e      n'e=kobie-reili.      omni      kobei-ge      juode-ye.*  
 people-COM RECP=separate-INTR:1pl    people    separate-LOC    see-INTR:1sg  
 'We separated with the people. When leaving the people, I looked. (Jochelson 1927:313)

これは彼女自身が経験したことなので、動詞接尾辞 *-l'el* が現れていないのは当然のことと言えよう。そして少女は好きな少年の姿を認める：

- (26) *yuo-lge      yuolegiede+budie-n manail'e-gi    yodojube+laxil tite    kunlune-i.*  
 [see-SS:1/2sg]    shoulder+on-ALL    hair-POSS    squirrel+tail    like    be.spread-INTR:3sg  
 'When I looked, his hairs were spread like squirrel's tails on his shoulders.' (Jochelson 1927:313)

夕方になり、少女がさびしい気持ちでいるところに、物音が聞こえる。テントの穴から外を覗くと、何とその少年がやって来たのだった。少女は恥ずかしくなって身を隠す。

- (27) *kutie-n+xonde-gen      egede-če      —lem-dik?    met yogora    kel-u-l!*  
 skin.cover-ATTR+hole-PROL    look.out-INTR:1sg    what-FOC    I    George    come-0-ANR  
 'Through a hole (of the tent) in the cover, I looked out, and what I saw? My George has come!' (Jochelson 1927:313)

以上に3つの文例を引用したが、どの文例にも動詞接尾辞 *-l'el* は出現していないし、この歌全体を見渡しても *-l'el* の出現はない。少女が一貫して自分の恋心や、自分が経験した出来事を歌っているという文脈を考えるなら、このような状況は当然とも言える。過去のユカギール語のテキストにおける1人称の語りを見つけるのはそもそも困難ではあるが、今後は民話の中に直接引用された会話等が探索の手がかりを与えてくれるかもしれない。

#### 4. 動詞接尾辞 *-l'el* の用法の歴史的変化の可能性

検討の範囲はごく狭いものにならざるを得なかったが、現代および過去のコリマ・ユカギール語における動詞接尾辞 *-l'el* の出現状況をここまで観察してきた。その結果、明らかになってきたことをまとめておこう。

まず初めに、第1の基本的意味（「直接目撃していない」）を持つ接尾辞 *-l'el* は、現代のユカ

ギール語の3人称の語りにおいて比較的頻繁に出現する。このことは民話テキストの序盤で特に目立ち、たとえば上で観察した例文(11)や(12)がこの例である。一方、テキストの中盤ではその出現頻度が明らかに落ちる(たとえば上にあげた例文(13)から(15)における欠如)。これに対して、過去のユカギール語における3人称の語りでは、接尾辞 *-l'el* の分布状況が異なっている。すなわち、この接尾辞は民話テキストの冒頭から欠如しており、テキスト全体を通じて現れないのが一般的である。3人称の語りにおけるこの分布状況の違いは、現代と過去のコリマ・ユカギール語のテキストを比べたとき、最も顕著な違いである。なお、1人称の語りに関しては、現代と過去のユカギール語において大きな違いは見られず、ともに *-l'el* の出現はわずかである(たとえば例文(19)と(22))。これはおそらく、「直接目撃していない」という意味と1人称の語りの両立がそもそも難しいことによると考えるのが妥当であろう。

次に、第2の基本的意味(「過去の事態に関する適切な情報を得た」)を持つ接尾辞 *-l'el* は、第1の基本的意味を持つものより全体的に頻度は少ないが、おそらく現代のユカギール語のテキストにおいては出現が確かめられる。たとえば3人称の語りにおける例文(16)と(17)、そして1人称の語りにおける例文(19)などがその例である。一方、過去のユカギール語のテキストにおいては、少なくとも上で検討したテキストの範囲では、出現を確かめることができなかった。例が非常に限られているので確定的なことは言えないけれども、第2の基本的意味を持つ *-l'el* の生起が、過去のユカギール語においては非常に少なかったことを、この観察は示唆しているのかもしれない。

最後に、全体的な状況を見渡してみたとき、コリマ・ユカギール語の動詞接尾辞 *-l'el* は、過去よりも現代のコリマ・ユカギール語において、テキスト中に盛んに生起している。すなわちそれは頻度高く生起しており(特に3人称の語りにおいて)、また第1と第2の基本的の意味にわたる意味・用法も多彩である。前節で検討したテキストのジャンルが共に民話テキストであり、語られている内容に大きな違いがないことを前提に置くなら、このことは接尾辞 *-l'el* の意味・用法の方に何らかの歴史的変化が起こった可能性を伺わせる。

ここで最も問題とすべきは、過去のユカギール語におけるこの動詞接尾辞の生起の少なさであろう。特に、自ら目撃したのではない過去のできごとや、そもそも人間が関与していない自然界のできごとを語る民話テキストであるにもかかわらず、そこに現れてしかるべき *-l'el* が出現しないという状況を説明する必要がある。ここで考えられる最も単純な説明はおそらく、過去のコリマ・ユカギール語における接尾辞 *-l'el* に「非＝目撃」を語るという用法が備わっていなかったというものであろう。しかしながらこの説明は、第2節の前半で検討した Jochelson (1905) の記述の存在によって退けられる。事実、ヨヘリソンの行った記述は例文を伴った詳細なものであって、このような説明を退けるのに十分な証拠を提供している。

このように考えるならば、次のように仮定するのが不可避であると思われる。すなわち、ヨヘリソンの記述に確認されるように、過去のコリマ・ユカギール語におけるこの接尾辞に「非＝

目撃」を語るという用法は備わっていた。しかしその用法は、ヨヘリソンの記述に残されたような日常生活を語るケース（例文（3）や（4）のように「家を建てた」「トナカイが走り過ぎた」など）に制約されるものであり、民話を語る場合には適用されなかった、という仮定である。民話で語られる世界に関して現代人が無条件の前提としてしまいがちな現実との乖離の感覚を、過去のコリマ・ユカギール人が本当に持っていたのかどうか、ここで問うてみるのも良いかもしれない<sup>7)</sup>。少なくとも Jochelson (1927) に収録された民話テキスト（すべてが3人称の語り）において、動詞接尾辞 *-l'el* の全般的欠如という特徴は顕著である。何らかの一般的な要因の介在がない限り、このような状況の全体を説明することは困難だと思われる。

過去のユカギール語の民話テキストにおける動詞接尾辞 *-l'el* の上のような用法は、現代のユカギール語においてもなお残存しており、主として筋が力強く進んでいく局面で典型的に現れると考えられる。3.1.1 節（3人称の語り）で検討した民話テキストでは、状況設定が済み、物語が動き出す中盤に入ったところで接尾辞 *-l'el* が姿を消す。この段階で民話が本来の姿を取り戻したと見ることもできよう<sup>8)</sup>。このような想定の正否はもちろん、より多くのテキストに当たり、接尾辞 *-l'el* の生起を調べることによって確かめられなければならないが、いくつかの民話テキストを調べた限りでは、筋が動き出す中盤以降に接尾辞 *-l'el* の生起が少なくなる傾向は共通している。たとえば、別の民話テキストから例をあげると、状況設定を行うテキストの序盤では *-l'el* が現れている：

- (28) *irki-n šoromə modo-l'əl sredn'ekolimsk arqa:, ö-ŋo:-jə*  
 one-ATTR person live-INFR:INTR:3sg Srednekolymsk near child-COP-ATTR  
*šoromə-k.*  
 person-FOC  
 'There was a man near Srednekolymsk, a young man.' (Nikolaeva 1997:16)

一方この人物が行動を開始するタイミングで接尾辞 *-l'el* は姿を消していく：

- (29) *taŋ šoromə čirčumu šaqal'əš-u-m, tude mi:jī:-gə ultə-m,*  
 that person everything prepare-0-TR:3sg his sledge-LOC tie-TR:3sg  
*mi:jī:-gə kebes'.*  
 sledge-LOC go-INTR:3sg  
 'That man prepared everything, tied down [the load] on his sledge, [and] went on the sledge.' (Nikolaeva 1997:16)

では、現代のコリマ・ユカギール語の民話テキストにおいて、序盤に頻出する動詞接尾辞



-*l'el* の用法—つまり例文 (11), (12) や (28) に見られる用法—はどのようなものだろうか。いずれも物語の序盤の、状況設定を行う箇所に現れることに注目するなら、これらの用法は伝聞 (「~だそうだ, ~ということだ」) に近いことは確かであろう。この用法はもちろん第1の基本的意味に属し、過去のコリマ・ユカギール語においても確立した用法であった (Jochelson 1905)。とすれば、現代のユカギール語においては、この用法が物語世界にまで拡張され、民話における状況設定を行う機能を持つに至ったと想定することが可能ではないだろうか。

Maslova (2003b) は文法記述の中で、接尾辞 -*l'el* の出現する節が、それを持たない節よりも昔の事態を表わしている場合が見られることを指摘している：

- (30) *šašat-te ile uörpe-p-ki l'e-ŋi / uörpe-p-ki-n+uör-pe*  
 now-CP some chile-PL-POSS be-3pl:INTR child-PL-POSS-ATTR+child-PL  
*ninge-ŋi / sovetskij a:ji el+gude-de kieje tudel*  
 many-3pl:INTR [Soviet CP NEG+become-POSS:ATTR before] he  
*qojdid'a:je l'e-l para:-ge šörile čuŋde-l-ge kučie-l'el*  
 [priest-ANR be-ANR] time-LOC letter read-ANR-LOC learn-INF(3sg)  
*čuöle-d+omni: luči: tite*  
 ancient-ATTR+people Russian as  
 'Now, too, some of his children are alive. There are lots of his grandchildren. At the time when there were no Soviets yet, when there were priests, he learned to read Old Russian.' (Maslova 2003b:172-173)

この例で接尾辞 -*l'el* が現れる節では、ソヴィエト以前 (帝政ロシア) のことが語られている。それは彼の子孫たちが生きる現在から見ればはるか昔であり、語り手も目撃していない世界である。これを「伝聞」と考えることも不可能ではないであろうが、このような用法はもはや「伝聞」というよりは「回想」に近い。物語世界の序盤においても同様の機能が果たされていると考えることができよう。すなわち現代のコリマ・ユカギール語の民話の語り手は、語っている現在の時点から回想し、動詞接尾辞 -*l'el* を用いつつ、次第に物語世界に入っていく。そしていったん物語世界の閾が解き放たれたとき、回想という桎梏を脱して語り続けるのだ。

- ✓ 7) 斎藤 (1993) はシベリア民話の概説の中で、語りとシャーマニズムの共通性について次のような指摘を行っている：「わたしたち日本人にとってはもはや民話の主人公やストーリーは人間が作りだした虚構にすぎなくなってしまう。しかし、シベリアの諸民族にとってはそれは夢と同じく現実作用する力を持ち、人間の生活に積極的に働きかけるものである。物語の主人公は人間の目には見えなくとも、現実に存在するものと考えられている」(斎藤 1993:45)。
- ✓ 8) その語り口は時に、現実起こった事件さえも民話の世界の中に取り込んでしまうのかもしれない (たとえば例文 (20) のように)。

## 5. おわりに

ここまで論じてきたことをまとめれば、過去から現代のコリマ・ユカギール語への変化において、動詞接尾辞 *-l'el* に新たに加わった用法はおそらく「回想」であるということになる。そしてこの「回想」という用法が、現代のコリマ・ユカギール語の民話テキストにおいて、回想から始まり、しだいに物語世界が立ち現われてくるような、重層的な語りを可能ならしめたと考えることができよう。この最後の節では、以上の議論をユカギール語全体から見た場合、どのような変化の過程が想定できるかという問題について考えてみたい。

Maslova (2003a:231) が指摘する通り、現代に残った2つのユカギール語での状況を比べてみると、民話等のナラティヴにおける動詞接尾辞 *-l'el* は、コリマ・ユカギール語においてより多く出現し、ツンドラ・ユカギール語では相対的に少ない。本論文での観察結果をここに加えるなら、コリマ・ユカギール語を通時的に考察すると、この動詞接尾辞は、現代のコリマ・ユカギール語においてより多く出現し、過去のコリマ・ユカギール語では相対的に少ない。さらに、同じ現代のコリマ・ユカギール語についても、Krejnovič (1982:284-288) に採録されているコルコドン川流域の方言で語られた民話テキストでは、冒頭から接尾辞 *-l'el* が欠如しており、明らかにこの接尾辞の出現が少ないことが確かめられる。この最後の点については、コルコドン川流域の方言のテキストがごく少数である現状で確定的なことは言えないけれども、現代のコリマ・ユカギール語の内部においても、下位方言のレベルで用法が異なっている可能性が示唆される。

このことを歴史的変化の視点から見ると、ユカギール語で過去から継承されてきた動詞接尾辞 *-l'el* は、コリマ・ユカギール語の、おそらくはネレムノエ村周辺の下位方言において特に顕著な意味・用法の発達を見せたのではないかと考えられる。1910 年前後生まれの話者がすでに豊富な用例を提供している点から見て、おそらくこの変化は 20 世紀の前半の早い段階で起こったものであろう。その変化の原因の究明は今後の課題であるが、このような変化を通じて、ネレムノエ村周辺の現代のコリマ・ユカギール語の民話が、より複雑で重層的な語りを手に入れることになったことは確かであろう。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 16K02675 の助成を受けたものです。また、現地調査において暖かいご協力をいただいたネレムノエ村の皆様に感謝を申し上げます。

## グロスに用いた略語一覧

ABL=ablative, ACC=accusative, AFF=affirmative, ALL=allative, ANR=action nominalizer, ATTR=attributive, ASC=associative, CAUS=causative, COM=comitative, CONV=converb, COP=copula,

CP=connective particle, FOC=focus, IMP=imperative, INC=inchoative, INFR=inferential, INSTR=instrumental, INTR=intransitive, IPFV=imperfective, ITER=iterative, LOC=locative, NEG=negative, OF=object focus, PFV=perfective, pl=plural, POSS=possessive, PROG=progressive, PROL=prolative, PRPR=propriative, RECP=reciprocal, RES=resultative, sg=singular, SS=same subject, SUP=supine, TR=transitive, 0= 挿入母音 u あるいは挿入子音 l, 1=first person, 2=second person, 3=third person, 1/2=first and second person, [ ]= 節の境界 (明示する必要があるときのみ)

### 参考文献

- Aikenvald, Alexandra Y. & R. M. W. Dixon (eds.) (2003) *Studies in evidentiality*. Typological Studies in Language, volume 54. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Jochelson, Waldemar (1905) Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist* new series 7(2): 369-424.
- (1927) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*. The Jesup North Pacific Expedition, volume 9, Memoirs of the American Museum of Natural History. Leiden: E. J. Brill.
- Krejnovič, E. A. (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Maslova, Elena (2003a) Evidentiality in Yukaghir. In: Aikenvald and Dixon (eds.) (2003) pp. 219-235.
- (2003b) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Mouton Grammar Library 27. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Nikolaeva (1997) *Yukagir texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.
- Pereltsvaig, Asya (2017) *Languages of the world: An introduction*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- 斎藤君子 (1993) 『シベリア民話への旅』 東京：平凡社.

## The Historical Development of the Verbal Suffix *-l'el* in Kolyma Yukaghir

Fubito ENDO

### Abstract

A detailed observation of how the verbal suffix *-l'el* (traditionally described as the evidential or inferential mood marker) is used in various contexts in Kolyma Yukaghir folklore texts from the viewpoint of evidentiality reveals that there is considerable discrepancy between the grammatical descriptions of the language and the usage of the verbal suffix in actual texts. Moreover, folklore texts in Kolyma Yukaghir, recorded around one hundred years ago, show only a few occurrences of the verbal suffix in the texts on mythical or ancient events, which the storytellers could not witness. The author examines the possibility of historical change in the usage of the verbal suffix and proposes that the suffix historically developed its new usage of recollection. A sub-dialectal difference in the course of the historical development has also been suggested based on its comparison with Tundra Yukaghir and the Korkodon sub-dialect of Kolyma Yukaghir.